
有希子・愛ふたたび

滝龍太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有希子・愛ふたたび

【Nコード】

N3560L

【作者名】

滝龍太郎

【あらすじ】

高校を卒業と同時に同棲をした有希子は、自分がまだ子供だったゆえに別れてしまった氷川良介と、十年の月日が流れて街で偶然遭遇してしまった後、良介を忘れられず苦悶の世界に突入してしまう。そして、思わぬ人を好きになってしまう。

有希子・愛ふたたび

滝 龍太郎

1

(暗い、真っ暗だわ。何も見えない)

首を左右に振って何かを探すのだが、真っ暗で物の形さえ見えな
い。

それとも物などなく、真っ暗の中の空間なのかも知れない。
足を進めるにも摺り足状態である。

(ここはどこかしら? なぜこんな所にいるのかしら?)

有希子は不安な気持ちよりも、なぜという疑問の方が強かった。

一寸先も闇というのはこの事なのだろう。

すぐ目の前も見えないのである。

まるで、黒い紙を目の前に貼ったようであった。

(どうしよう)

悩んでみても先は進まないのだが、左右前後、どちらへ行ったら
いいのかわからないのである。

取り敢えず、手探り状態であつても前へ進まなければならないの
で、体の向いているまま足を進めてみた。

両手は泳ぎながら、足は摺り足である。

真っ暗な中にもいくらかの物は見えるのが普通なんだが、何も見
えない。

物があれば、たとえ暗闇であつてもその輪郭はうつすらと見える
わけだが、それも見えないという事は何も物が無いのだろう。

（外？）

有希子の感覚が少しづつ作用してきたのか、考える力が出て来たのである。

（靴を履いてるわ。外に違いない）

足の感覚だけでなく、有希子は自らの手で靴を触ってみた。

そして、下は土である。

立っている場所は土の上であり、舗装された道路とは違っていた。屈んで土を触ると、うっすらと見える土面には草などはなく、平坦な場所のようである。

（どこへ行こうとしてたのかしら）

服は普段着である。

（いいわ。取り敢えず歩いてみよう）

不安より疑問なんだと、有希子は真っ暗な野原を歩いてみる事にした。

ときおり、シュツと小さい音を出して耳をかすめて何かが飛んで来る。

虫のようである。

あっ！

真っ暗な中に、そこだけ明かりが灯っているかのように、赤トンボが飛んでいる。

有希子の目の前を、一匹、二匹、三匹と、その数は増え、まるでこつちよと言わんばかりに通り過ぎて行った。

羽は金色に輝き、鮮やかな色の赤トンボである。

待って！

赤トンボの後を、真っ暗にも拘わらず有希子は駆け出していた。先の方に赤トンボが見える。

が、その距離はどんどん離れてしまう。

そして、赤トンボは見えなくなり、再び暗闇の世界になってしまった。

（あんな綺麗な赤トンボ、初めて見たわ）

金色にはばたく羽。陶器のような色彩を持った赤い体。

子供の頃に見た赤トンボとはかなり違っていた。

子供の頃は夢中で赤トンボを追ひ、大人になるにつれ見えなくなり、思春期になると再び見えるようになる。

人は恋をすると、何もかもが素晴らしく見えるようになるものである。

赤トンボを見れば、捕まらないようになどと思ってしまふのである。

今の有希子の心境は、失恋の痛手から立ち直ろうと前向きの姿勢ではあるが、正直なところ何かのきっかけがほしいのである。

暗闇に光る金色の赤トンボ。

追ってみたくなるのは当然の事である。

一寸先も見えない暗闇なのに、いつの間にか有希子は摺り足ではなくしつかりと歩いていた。

赤トンボが不安を取り除いてくれたのであろう。

あらっ！

いきなりである。

目の前に、ススキの生い茂る小高い丘が現れた。

赤トンボの時と同じように、そこだけ明かりが灯されており、ススキの穂が浮かび上がって見えている。

しかも、その穂の色が金色に輝いている。

（なんて綺麗なのかしら）

子供の頃に見たススキとはまるで違っていた。

有希子は、心が洗われるように見入ってしまった。

真っ暗な中に、そこだけ明かりが灯され、金色に輝くススキの穂。想像しただけでも、この世のものとは思えない素晴らしい眺めであらう。

しかも小高い丘、まるで宙に浮いている感じである。

（凄いわ！）

有希子は、ススキの穂に触ろうと小高い丘に近づいた。

そしてススキの穂に手を触れ、握った。
あっ！

穂に触れた感触があり、穂を握ったと同時に小高い丘ごと消えてしまったのである。

当然、手の中には何も無い。

また、前と同じように暗闇の世界へ戻ってしまった。

（どうしたのかしら）

まだススキの穂の感触が手に残っている。

いくらかイガイガがあり、柔らかい羽毛のような穂先の感触である。

その感触の温もりというか、余韻というか、確かに手の中に何かがあったのである。

それが一瞬のうちになくなり、小高い丘までもなくなってしまうことに、有希子はいささかの不安を抱いてしまった。

（ここはどこなんだろう。現実の空間ではないのかしら）

有希子はそんな事を考えてみたが、有り得るわけがないと頭を振った。

しかし、この暗闇。

先の方を見ても何の明かりも見えない。

そして赤トンボやススキ、いきなり現れては消えてしまう。

やはり現実の空間ではないのではないかと、有希子は頭を何度も振ってみた。

（分からないわ。とにかく、先に行ってみるしかないわ。また何かが見れるかも知れない）

そんな事を考えながら、有希子は先に進んでみた。

暗闇は同じである。

自分の足さえ見えないくらいの暗闇を、一步一步進むしかなかった。

（なんだろう？）

五分ほど歩いただろうか、先の方に明るい所が見える。

右から左に一本の筋になっており、キラキラ光っている。
有希子は足を速めた。

近づくにつれ、その一本の帯は川だと分かった。
幅は狭く、水は今にも溢れんばかりに満杯である。

その水がキラキラと光っていたのである。

有希子は川の中を覗いてみた。

水は透きとおっており、川底までも見る事が出来た。
きれい！

金色に輝くメダカが泳いでいる。

有希子は思わず声が出てしまった。

満杯の水はゆっくりと流れ、その中に金色のメダカが泳いでいる。
それもかなりの数である。

他にアメンボやミズスマシ、ゲンゴロウまでも金色に輝いており、
平和なひとときを過ごしているかのようにゆったりとしていた。

有希子はこれらに目を吸い取られていたが、ふと現実に関頭を切り
替えた。

（手を出せばまた消えるんじゃないかしら）

そんな事が脳裏をかすめたが、思い切って水の中に手を入れて
みた。

冷たい！

（本物だわ）

水の冷たさが手に伝わり、今までとは違う感触に安堵の表情を浮
かべた。

金色のメダカが、有希子の手にとわりついて来た。

まるで、すくってくれと言うように、有希子の手を突っ突いて来
る。

有希子は両手を入れ、手のひらを広げてすくう格好をした。

メダカは全部で五匹、有希子の手の中に入り、掌を突っ突いてい
る。

（くすぐったい）

確かな感触である。

（本物だわ）

有希子は安心し、五匹のメダカを手の中に入れ、水の中から手を出してみた。

あっ！

その瞬間、辺りは真っ暗になり、川は消え、手の中の感触もなくなってしまった。

（また同じだわ）

暗い闇の世界。

現実に戻された有希子は、わけが分からなくなっていた。

赤トンボにススキ、そしてメダカ。

それら全てが金色に輝いていたのである。

子供の頃、野原で赤トンボを追ひ、ススキの穂を摘み、小川でメダカを見た思い出が今蘇って来たのである。

しかし、その全てが現実とは掛け離れ、金色に輝いた別世界の出来事のようにであった。

その証拠に、手に取ると消えてしまう事実である。

この事実を、知るといふ事の方が無理な事であろう。

2

大手デパートという所は常に人の出入りが活発で、特に婦人服売場となると余計である。

有希子は次から次へと来るお客に、他の事を考えている余裕はなかった。

十年前に別れた氷川良介の事が忘れられず今日まで来てしまったのだが、つい先日、街で良介とばったり遭ってしまったのである。

十年間暖めていた愛が一気に爆発しかけたが、良介の一言で有希子は全てを失ってしまった。

（俺、結婚したんだ）

この言葉が、有希子の脳裏から離れないでいた。
なんでなの？ と有希子は自問自答してみたが、それは当然の事であった。

何年かの同棲生活の果て、有希子は一人になって寂しさに耐えて来たが、それは良介が心の中にいたから耐えられたのである。

それこそ、誘惑も数え切れないほどあったのだが、その全てを断ち切って来た。

それなのに、なぜ？ という自分勝手な思いが先行していたのである。

今度はその思いを断ち切らなければならぬ悩みに、忘れよう、忘れようと努力するたびに心の闇に吸い込まれてしまうのである。

「有希、今夜空いてる？」

同僚の中村仁美が誘って来た。

仁美とは同じ歳で、一番仲が良く、ちよくちよく仕事帰りに居酒屋などに寄っていた。「空いてるわ」

何かがふっ切れたわけではないのだが、いつもの口調よりトーンが上がっていた。

「いらっしやいませ」

自分の事など考えている余裕もなく、次から次へと接客をこなさなければならなかった。

「仁美、今日は違った所に行ってみない？」

いつも行く大手チェーン店の居酒屋ではなく、洒落たクラブにでも行ってみないかと、有希子が提案した。

「いいわね。いい男がいるかもね」

仁美がニツと笑った。

仁美も有希子と同じように彼氏がいたのだが、一年前に別れている。

有希子同様、美人の仁美も誘惑が多く、彼氏との別れ方が良くなかったのか、口では良い男がいらないかなどと言うものの、今一歩踏み出せないでいた。

仕事が終わる、有希子と仁美は化粧を直し、というよりいくらか濃いめに化粧をしてデパートを後にした。

いつも行く居酒屋を通り過ぎ、横道に入ってみた。クラブ、何々という看板がいくつか見える。

「どこが いいかしら？」

仁美が聞いた。

「そうね、ラ・セーヌ。あれなんか素敵な名前で良さそうよ」

「いいわね」

ビルに洒落た入口が付いていて、広い階段が上に向かって中段ぐらいまで見える。

それを上がると、広い踊り場があり、その先に洒落たドアがあって、その前にドアボーイが立っていた。

「いらっしやいませ」

ドアボーイは、二人を見ると深々と頭を下げ、ドアを開けた。

「良い感じね。でも高そう」

仁美がボソボソと有希子の耳元で囁いた。

「そうね」

中に入ると、薄ぼんやりとした明かりの中で、何組かの人が寄り添って踊っていた。

「いらっしやいませ。こちらへどうぞ」

ウェイターが深々と頭を下げ、二人を案内した。

ゆったりと座れるソファに、二人を相向かいに座らせ、ウェイターがメニューを広げた。

二人が覗き込んで見ると、確かに高い。この雰囲気、いたしかたないのだろう。

二人はカクテルに簡単なおつまみを頼み、辺りの様子を窺っていた。

「カッパルで来る所みたいね」

仁美が残念そうに言うと、

「そうね、彼氏と一緒に来たい場所ね」

有希子はそう言うものの、雰囲気がとても良く、辺りをキョロキョロしていた。

奥の方では生バンドがスローな曲を演奏している。

「ステキだわ」

有希子は雰囲気酔いに酔い、うっとりとした。

良介と同棲をしていた時、このような所へは来た事がない。

お金がなかったし、二人でいれば幸せという時だったので、他の事は考えもしなかったのである。

しかし、今このような雰囲気のある場所に來て、良介と二人で来たならどうかしらと、心の中で激しく何かがぶつかっていた。

（でも、良介はもう他の女のものだわ）

急に現実に戻り、有希子が頭を振った。

「どうしたの？ 今日の有希へんよ」

仁美が心配そうな顔をして聞いて來た。

「ううん」

有希子は仁美の顔を見て、ちよっぴり悲しい顔をした。

「何かあったんでしょう」

有希子の様子を見ていれば、当然の質問である。

「ええ……」

有希子の悲しい顔が、更に強くなった。

そこへ、ウェイターがカクテルとおつまみを持ってテーブルの上に置くと、ママさんらしい女性がツールに座り、いらっしやいませと言ひ、深々と頭を下げた。

「初めてかしら？」

「ええ」

当然、分かっているだろうが、社交辞令でそういう聞き方をした。「嬉しいわ。女性の二人連れなんて滅多に來ないのよ。ほとんどがカップルさんなの」

「そういう雰囲気よね」

仁美が残念そうに言った。

「他には男性だけのお客様ね。それも素敵な人ばかり」

商売上手なママは、女性同士で来ても楽しめると仄めかした。

「雰囲気が良いですものね」

うつとりとしていた有希子が言った。

「誰かと来たいんでしょう？」

仁美が言うと、

「そう、誰かとね。でも、もういないの」

と、有希子が悲しそうに言った。

「そうなの？ そうだったのね」

仁美は悲しんでいる有希子の気持ちが分かったのか、

「次があるわ」

と、わざと冷たく言い、カクテルを有希子に渡し、乾杯と言ってぐつと一息に飲み干した。

仁美の、有希子に対する思いやりである。

「あらあら、何があったのか知りませんが、私も仲間に入れてもらおうわ」

ママはそう言ってウェイターを呼び、コニャックのボトルを私からと言い、二人に差し出した。

「えーっ、いいんですか？ ありがとうございます」

仁美が喜んでいる。

「すみません」

有希子は、自分の悩みを分かち合ってくれた事に感謝した。

これが失恋と言えるのか分からないが、少なくとも目の前にいる二人の女性には、自分の悲しさが分かってくれたのである。

「さあ、飲みましょう」

飲んで全てを忘れましよう、ママは有希子の気持ちをくんでくれたのである。

「そうよ、飲みましょう。その内いい男が現れるかもよ」

仁美は、実際にそんな事を期待しているのだろう。

「ええ、期待しましょう」

ママが持ち上げた。

「ありがとう」

有希子は暖かい輪の中にいるようで、心が安らいでいた。

「あらあら、そんな悲しい顔しないで」

有希子は口を閉じ、目に涙を溜めている。

ママが心配そうに言うが、それが却って引き金になり、有希子の目から大粒の涙がテーブルに落ちてしまった。

「ごめんなさい」

有希子は、心の安らぎの中にも良介の事を思い出してしまい、涙を溜めてしまったのである。

「有希、涙をいっぱい流してさ、忘れちゃいな。男なんていっぱいいるわ」

仁美が有希子を慰めると共に、自分にも言い聞かせていた。

「そうよ、この世は男と女しかいないんだから。出会いなんて沢山あるわ。これからだって良い人に巡り会うわよ。忘れる事は無理かもしれないけれど、良い思い出として胸の中に大切に仕舞っておけば、素晴らしい事だと思うわ」

ママが優しく、諭すように言った。

「うん」

有希子は子供のように、素直に頷いた。

（大切な思い出。良介との思い出。二人きりの思い出）

有希子はそんな事を考え、一つの区切りが出来たのか、心がいくらか穏やかになって来た。

「ありがとう。前を向いて生きて行けそう」

「有希、良かった。前を向けるなら、きっといい男が見つかるわ。私も負けていられないわ」

仁美は冗談とも本気とも取れる言い方をした。

「そうね、いい男を探すわ。仁美、競争よ」

「そう、その意気」

有希子の笑顔を見て、ママは我が子のように喜んで二人を激励し

た。

今夜の出来事は有希子にとっては大きな前進であり、これからの未来における大きな一歩であった。

3

「いらつしやいませ」

三十前後の男性が一人、婦人服売場に入って来た。

「あつ、先日はありがとうございます」

その男性は有希子を見つけると側にやって来て、ぺこりと頭を下げた。

「喜んでいただけたのですね」

何日か前、彼女へのプレゼントとして、年格好を聞いて有希子が洋服を選んであげたお客である。

「ええ、とても喜んでくれました。ほんとにありがとうございます」

その男性は、再び有希子に頭を下げた。

「それは良かったですね。役に立てて良かったですわ」

「お陰さまで」

また頭を下げて、男性は婦人服売場から出て行った。

わざわざお礼を言いに、有希子に会いに来たのである。

「わざわざ来てくれるなんて、なんて律義なんでしょうね」

そばにいた仁美に言つと、

「素敵なお人ね」

と、その男性の後ろ姿を見ながら、仁美が気持ちを込めて言った。

「そうね、心も素敵そう・・・」

有希子も気持ちを込めた言い方をした。

「彼女幸せね」

仁美のこの言葉は、有希子にとって良介を思い出させる言葉であった。

「そうね・・・」

幸せだった頃、心は常に弾んでいた。

若かったせいもあるが、毎日が浮き浮きとして夢があったのである。

しかし、今は単にもくもくと仕事をし、無意味に時間が経って行っているといった感じである。

「思い出しているんでしょう？」

有希子がぼーっと後ろ姿を見ていたので、仁美が心配そうに聞いて来た。

「うつん・・・」

有希子はごまかしたが、心の中を見透かされているようだった。微妙に揺れ動く心の彩り。

（何かしら？）

有希子の心の中に、一つの何かが浮き出していた。

良介との熱い抱擁。楽しい思い出。

（いや、違うわ）

終わってしまった恋に心はときめかない。

「有希、変よ」

仁美のこの言葉に同調したのか、有希子が同じように言った。

「そうなの。変なのよ」

そう言う有希子の表情は明るい。

「何が、どう変なの？」

お客がいらないのをいい事に、仁美が興味本位で聞いて来た。

有希子の表情を見ると「変な事」を楽しんでいるようである。

（うん！ まさか？）

有希子の顔は店の外へ向いたままである。

仁美が分からないといった顔で、有希子に聞いた。

「今の人？」

半信半疑で聞いてみた。

「そう・・・」

何かがふっ切れたように、有希子がケロリと言った。

「だって」

仁美が言いかけたのを有希子が手で遮り、

「分かってるわ。あの人には彼女がいるのを」

と、分かった上での感情であつた。

有希子に未知の何かが動いたのだらう。

失望と不安の中、何かに縋りつきたい。いや、何かを求めたい。いけないと思いながらも、交差する感情に負けてしまったのかも知れない。

有希子がそう言うと、仁美は何も言えなかった。

横恋慕な事をすれば不幸になる事は分かっている、今の有希子にそんな事を言っても通じない事は、親友として良く分かっているのである。

あまりにも過去のしがらみが大きすぎたばかりに、目の前の何かを求めてしまう気持ちが仁美には痛いほど分かつていたのである。

「わたし……。悲しいとか、寂しいとかはもうないの」

真面目な顔をして、何かを訴えるように有希子が喋り出した。

「前を向こう、過去を忘れようと色々な努力をして来たわ。そりゃ、寂しい気持ちは中々収まらなかったけど、いつまでも終わった事を考えていてもしょうがないし、思い出は思い出として胸にしまっておけばいいって、そういうふうに考え方が変わったのよ」

喋っている有希子の表情は、心なしか寂しそうである。

そんな有希子の顔を見て、仁美は有希子が可哀想になつていた。

「私にはもう人を愛せないかも知れない。そんな不安を抱いた事もあつたわ。でも、今は違うの。愛に積極的になろう。愛のある人を見てみよう。そして、愛を取り戻すんだ……」

有希子はそこまで言うと、いきなり大粒の涙をこぼし始めた。

仁美は何も言わず、黙つて有希子の顔を見ていた。

「人を……。愛せる人が羨ましくなつてしまったの」

有希子の涙は止まらない。

「あの人は愛を知っているのよ。きっと幸せな人生を歩んでいるんだわ……」

そこまで言っと、

わぁーっと、仁美の肩に顔を埋め、大きな声で泣き出してしまった。

お客がいないので助かったが、仁美はどうしていいのか分からないでいた。

「そんな、そんな愛がほしくなったの……」

大きな瞳から、大粒の涙が止めどもなく頬を伝わっている。その涙が、仁美の肩を濡らしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3560/>

有希子・愛ふたび

2010年10月8日15時04分発行